

---

# バカと天才？と転生者達

三等星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと天才？と転生者達

### 【Nコード】

N1013BA

### 【作者名】

三等星

### 【あらすじ】

真夜は原作知識を持った転生者。原作の知識を持つ真也はどのように動くのか！？途中で前の世界の友人も転生してきて物語はどくなっていくのか……。作者はこれが処女作な上、理系です。御指摘はできる限り参考にしていきたいと思っています。更新も不定期になると思います。それでは、楽しんでくださったら幸いです。

## オリキャラ紹介

主人公 紗前さなまき 真夜しんや

髪は漆黒で短く、瞳の色も漆黒といった、生粋の日本人。

身長：178

体重：62

ある日、友人を助けて死んでしまい、神様に転生してもらった。面白い事が大好き（特に明久関連）で、面白いことの為なら手段を問わない。ちなみに鈍感。ケンカは強く、勉強も本気でやれば学年主席以上の点数をとれる。

黒宮くろみや 美知流みちる

青い髪を腰のあたりまでのばしており、スタイルもいい。瞳の色は橙色。

身長：163

体重：非公開

3サイズ：91 65 87

真夜に救われた友達。真夜がいなくなった後、ずっと助けられたことを気にしていて、その時に真夜と同じように人を助けて死んでしまい神様に転生してもらった。真夜とは友達以上の関係になりたいと思っている。

設定は変更・追加があれば更新していききたいと思っています。

## オリキャラ紹介（後書き）

これからがんばって書いていきたいと思えます！

## プロローグ

よう。俺の名前は紗前さまへ 真也まへ。突然だが俺は今見渡す限り白、といった奇妙な空間にいる。更になんか浮遊感まである。ここはいったい何なんだ？

『ここは神様たる、ワシの空間じゃ』  
「・・・は？」

思わず疑問の声をあげてしまってから、ここにいる前の記憶を探る。

「ああ・・・。俺、死んだのか」

何の感慨もなく、でた答えをつぶやく。

『そのとつりじゃ。じゃが・・・その・・・』  
「？」

何だか神様の歯切れが悪い。どうしたっていうんだ？

『お、お主の死んだ原因はワシなのじゃ』

「・・・」

『で、て入っ』

「そうか・・・死ねえ!!」  
言って、俺は拳を振り抜く。

『お、落ち着くのじゃ!!』

「これが落ち着いてられるか!!」

『は、話を・・・話を聞いてほしいのじゃ!!』

「・・・遺言を聞こうじゃないか」

『遺言!?ま、まあいいわい。それで、話というのはじゃ、お主が死んだ原因はワシにある』

「・・・ああ」

『そこでじゃ。ワシはお主に転生してもらおうと思っている』

「・・・それで?」 『もし望むなら、叶えられる範囲でいくつか願いを聞こうと思っている。もちろん転生する世界を選ぶ権利もお主にある』

「・・・ふむ」

悪くない話だな。問題は願いを何個で何にするかだな。

「・・・よし!!」

『決まったかの?』

「ああ。転生する世界はバカテス。願いは原作知識を完璧に持つておくことだ!!」

『それでいいのかの?』

「ああ。それと、美知流に気に病むなとっていたと」

『了解じゃ』

「最後にもう一つ。転生する年齢を3歳からにしてくれ」

『分かったのじゃ。それでは、お主はこれからバカテスの世界にく。頑張つて逝つてらっしゃい!』

「おい!?最後のどづいうことだ!」

『あつでゅ〜』

「こんちくしょ〜〜!」

こうして俺はバカテスの世界に転生した。



## プロローグ（後書き）

会話ばっかだ……。感想などいただければ嬉しいです。

## 設問 1 (前書き)

とりあえずFクラスに行く前まで書きました。

## 設問 1

俺は今、文月学園へ向かうべく走っている。理由は簡単。遅刻だからだ。

「遅いぞ紗前!!」

校門にたどり着いたところでドスのきいた声が響く。

「あ、おはようございます。鉄・・・鉄・・・鉄村先せ!？」

そこまで言ったところで、鉄人の拳が振り下ろされる。

「まったくお前という奴は・・・。言い直そうとしてなぜ言い直さ  
ん!?!」

「・・・て。で、鉄人。用があるんじゃない?」

「既に言い直す気は無いんだな...」

そんなものはない。

「まあいい。ほら、おまえのクラス分けテストの結果だ」

「どうも。って言ってもクラスはわかってるんだけど」

「ハア……。お前はなぜ名前を書かんのだ……」

そう、俺はすべてのテストで名前を未記入で提出したのだ。その理由は……

「そんなの、決まってるじゃないですか。……Fクラスのほうが面白いから。それだけですよ」

そう。そうゆう事なのだ。

「お前はそうゆう奴だったな。…ほら、遅刻何だからさっさといけ」

「ほいほいっ」と

……

3階まで上がっていると予想通り明久<sup>バカ</sup>が居た。

「よっ、明久」

「あっ、真夜。おはよう。見てよこの教室。いくら何でもすごいぞない？」

明久に言われて初めてAクラスの教室に目をやると、

「確かにスゴいな…」

(知識で知っていたとはいえ、これは想像以上だな…)

そんな事を思っていると明久<sup>バカ</sup>が何かを呟いた。

「噂は本当だったか…」

見ると明久<sup>バカ</sup>は霧島のほうを見ていた。

(ああ…、そっか。ふつうは知らないよな)

さてそろそろ行かないとな。

「おい、明久。そろそろ行くぞ」

「あっ、うん。行こっか」

そして俺たちはAクラスの教室を後にした。

## 設問2(前書き)

とりあえず姫路さんの登場まで。

## 設問2

「…教室を間違えたかな…」

「現実を見る、明久。これがFクラスの教室だ」

「嫌だ！認めたくない！」

「いいから、さっさと入れ。邪魔だ」

しかし、確かにこれは…。Aクラスとは違う意味で想像以上だな…。

「うう、諦めるしかないのか…。よし！！とりあえず…」

言って明久は扉を開ける。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

明久はいきなりそんな事を言われて微妙に落ち込んでいたが、言った相手を見ると

「あれ？雄二？何でそんなところに立ってるの？」

「雄二、お前はいつから先生になったんだ？」

俺は理由を知っているが、ノリで聞いてみる。

「んっ、明久<sup>バカ</sup>だけじゃなくて、お前も居たのか真夜。何、先生が遅れてるからな。ちよっと立ってみてただけだ。ってか、何で頭のいいお前がFクラスに…、とっ聞くまでもなかったな。考えれば明久

でも分かることだな」

雄二がそう言うと、明久が微妙に目を逸らす。

「明久…、まさか分からないのか？」

「まつ、まさか！そんな訳ないじゃないか！」

「そうか、なら言ってみろ」

「えっと…、男が好きだから！」

バキィ！！！！

「ブン殴るぞ」

「殴った後に言うセリフじゃないよねえ！！？」

お前が変なことを言うからだ。

「まったく…、こいつの性格を考えてみる」

「性格？……ああ……」

「つたく、ちつたあ自分で考える」

「返す言葉も無いよ……」

そんな会話をしていると、

「すみません、退いてもらえますか？それと、席についてください」

「ねえ雄二、席ってどうなってるの？」「適当なところに座れ」

「要するに決まってなうんだね……」

言いながら俺と明久は適当なとこに座る。

「えー、皆さん席についてください。おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願ひします」



そして先生は黒板に自分の名前を書こうとして…やめた。チヨークは普通は支給されてる物だろ…？ホントにこのクラスひどいな…。っと思いつながら改めて教室を見回していると、いつの間にか自己紹介が始まっていた。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。よく間違えられるから言っておくのだが、ワシは男じゃからの」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。よく間違えられるから言っておくのだが、ワシは男じゃからの」『何〜〜〜！！』

おお、見事にハモったな。それにしても、やっぱり秀吉はよく女に間違われるな。ちなみにFクラスでお馴染みのメンバーは、姫路以外1年の時に友達になった。

「……………土屋康太」

うん。流石はムツツリーニだ。ぼろをださないようにしている。

まあ、無駄になるわけだが。

「……………です。海外育ちで日本語は会話ができるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……………」

おっ、この声は……………」

「趣味は吉井明久を殴ることです」

「あつ…、島田さん…」

「八口ハロー、吉井」

やっぱりな。島田も照れ隠しで殴るのをやめればもう少し脈があり  
そうなのにな。っと、次は俺か。

「紗前真夜だ。特技は未来予知。だが簡単には教えてやらん」  
『チクシヨ~~~~!!』

まったく、うるさい奴等だ。あ、そういえば次が明久だな。てこと  
は耳をふさいでおくか。

「吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでね」  
『『『ダーリーリーリー……!!!!!!!!』』』  
「……………失礼、忘れてください。」

耳をふさいでも大音響だったな。さて、そろそろ……………

「す、すいません。遅れ、ました……………」  
『『『えっ?』』』

真打登場、だな。

## 設問2（後書き）

どうだったでしょうか。次からはできるだけ長くできたらいいなと思います。

### 設問3（前書き）

今回は結構頑張ってみました。それでは、ご覧ください。

### 設問3

「す、すいません。遅れ、ました…」

『『『えっ?』』』

ほとんどの奴等が驚きを声に出す。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします」

「は、はい。姫路瑞希です。よろしくお願ひします…」

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ！何ですか？」

「何でここにいるんですか？」

この質問は、普通なら大分失礼なものだが、この場合は仕方ないと言える。何故なら、姫路はテストでは常に上位10位以内に入るほどの実力を持つ才女で本来ならばこんな所に居るはずがないのだ。だからそれにはちゃんと訳がある。それは…

「そ、その……。振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……………」

そう、姫路は試験を途中退席をしてしまったため、無得点扱いとなり、Fクラスになってしまったのだ。そして、この言葉を切欠にクラスが騒がしくなる。

「ああ、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ理科か。あれ難しかったよな。」

「俺は弟が事故にあっただって聞いて……」

「黙れ一人っ子」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくて」

「今年1番の大嘘をありがとう」

知っているとはいえ、やっぱりFクラスは大体の言動が予想の斜め上をいくな。

「そ、それでは宜しくお願いしますっ」

それだけ言っただけで姫路は席に向かう。

「ふう…緊張しました」

「ねえ、姫路さ「姫路」

雄二がみごとに明久の言葉にかぶせてくる。あ、明久が落ち込んでる。

「あ、はい。えっと…」

「坂本だ。坂本雄二。宜しくたのむ」

「俺は、紗前真夜だ。よろしく」

「宜しくお願いします。坂本君、紗前君」

「それで姫路、身体はもう大丈夫なのか？」

「あつ、それは僕も気になるかも」

「よっ、吉井君!？」

姫路が明久に驚く。よし。ここは…。雄二と目配せをする。

「「姫路、明久がブサイクでスマン(わるい)」」



「……雄二、真也ちょっと…」

「っで、何のようだ？明久」

「まっ、予想はついてるけどな」

「そっか、それなら話が早いや」

「明久。ついでに言うておくと、俺が予想がついてるって言ったのは理由までだぞ」

「うっ…それなら隠しても無駄か…。なら、正直に言うよ。僕は姫路さんのために試召戦争をしたい」

「……………それで？」

「姫路さんは本来Aクラスに入れるはずだったんだ。なのにこんな所にいるなんてだめだ。だからAクラスの設備を手に入れて、本来の設備の中で勉強させてあげたいんだ」

「……………いいだろう。それに元々俺も試召戦争をする気だったしな。」

「俺も反対する理由はないな。むしろ、試召戦争ほど面白いものはないだろ！」

「そっか、良かった。でも、真夜はともかく雄二はどうして試召戦争をする気だったの？」

「何、勉強が全てじゃないって証明する為さ」

「まあお前ら、その話は終わりにして教室に戻るぞ。そろそろ先生が戻ってくる」



先生が戻ってきてからも順調に自己紹介はすすんでいった。

「さて、坂本君で最後ですよ。坂本君は確か代表でしたよね？」

坂本は鷹揚に頷くと教壇に立った。自然に雄二に視線が集まる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

そこで坂本は言葉を切って教室の設備を順番に見ていく。みんなの視線も雄二の視線を追っていく。

「Aクラスは冷暖房完備にリクライニングシート付きだが……」

「……不満はないか？」

『『大ありじゃあ!!』』』

Fクラスメンバーが魂から叫ぶ。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる』

一気に不満の声があがってくる。

「皆の意見はもっともだ。そこでこれは代表としての提案だが――

――

「――我々FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛

けようと思っ」

こうして俺たちは試召戦争への引きがねを引いた。

### 設問3（後書き）

書いてから思ったのですがバカテストはあったほうがいいのでしょうか？

もし、あったほうがいいと言う声が多ければやりたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1013ba/>

---

バカと天才？と転生者達

2012年1月3日01時46分発行